

ISSN 1882-0190

甲南女子大学

# 英 文 学 研 究

**STUDIES IN ENGLISH LITERATURE**

*Konan Women's University*

第 四 十 六 号

Volume 46

( 2 0 1 0 年 )

甲南女子大学英文学会  
Konan Women's University English Literature Society

平成22年3月31日 発行  
Issued March 31st, 2010

目 次  
*Contents*

---

A Two-dimensional Aspectual Analysis of the *Te-iru* Construction

..... TAOKA Chiaki .....3

★ ★ ★

『クリスマス・ストーリーズ』(その3)

.....藤本 隆康訳 .....19

Charles Dickens, *Christmas Stories* – Part III

..... Tr. By FUJIMOTO Takayasu

## 『クリスマス・ストーリーズ』（その3）

Charles Dickens, *Christmas Stories* – Part III

藤本 隆康訳

Takayasu FUJIMOTO

ひいらぎ  
柵の宿

## 三つの枝

## 第一の枝

## 私自身のこと

私にはこれまでずっと隠してきた秘密がある。私は、照れ屋である。誰もそんなことは思わなかっただろうし、今もそう思う人はいないし、過去にもそう思った人はいないであろう。でも、私は生まれつき照れ屋なのである。それは、私が誰にも話したことのない秘密である。

私が生まれつき内気な性質であることをお知りになれば、私が訪れたことのない数知れぬ場所のこと、私が訪問したり訪問を受けたりしたことのない人たちのこと、私がこれまで臆面もなくしてきた数知れない言い抜けのことを少し話すだけで、読者諸氏は大いに感動されるかもしれない。しかし、読者諸氏に感動してもらう話はひとまずお預けにして、当面の話始めることにする。

目的は私の旅と柵の宿での発見を率直に話すことである。私は人や馬を親切に世話してくれるその宿で、一度雪のために閉じ込められたことがあったのである。

それは、私がアンジェラ・リースに永遠に別れを告げた忘れ難い年のことであった。私は彼女と結婚する予定であったが、すぐに彼女が私の親友の方を愛していることが分かったからだった。学生時代から、私は口には出さなかったがエドウィンが私よりもずっと優秀な学生であることを心から認めていた。ひどく心が傷ついていたが、私は彼女がエドウィンを選んだのは当然だと感じ、二人のことを許そうと努めた。私がアメリカに渡ることを決意したのはそのためであった——どうせ破滅するなら、と思ったのである。

私は真実を知ったことをアンジェラにもエドウィンにも知らせず、祝福と許しを伝える愛情のこもった手紙を二人に書き、私自身が二度と故国には戻れないはるか遠くの新世界に旅立つ時に、その手紙を陸に向かうはしけに託して郵便局に送ってもらうことにした——つまり、私は悲しみを自分の胸に秘め、寛大になれる自分のことを思って自らを慰め、大切に思っていた人たちのもとを静かに去って、前述したように独り侘しい旅についたのである。

朝の五時に、私が最後に自分の部屋を出たとき、生気のない冬の侘しさがひとしお身に染みわた。私はもちろん蝋燭の灯りで髭剃りを済ませ、寒さで身が凍りそうで、起きると絞首刑が待っているという体全体が疼くような感じを覚えていた。それは、私がこうした状況で朝早く不時に起きる時にいつも感じる感覚であった。

法学院を出た時のフリート街の侘しさは、今でもまざまざと目に浮かぶ！ 街灯は北東の突風に煽られてちらちらと明滅し、ガスそのものが寒さで萎縮しているようであった。屋根に霜を置いた家々、荒涼とした星空、凍りつきそうな血を全身に巡らせようとしてせかせかとした足取りで市場に向かう人たちがや早起きして通りを徘徊する人たち。そうした人たちを持って成そうと、数件のコーヒー店や居酒屋から温かい灯りが洩れていた。ピリッと身を刺すような霜が立ち込め(風があらゆる割れ目に霜を吹きつけていた)、それが金属の鞭のように私の顔に打ちつけるのだった。

十二月、そして年が暮れるまで、あと九日を残していた。アメリカ合衆国に向かう郵便定期船は、天候が許せば、翌月の一日にリヴァプールから出航する予定だったので、それまで私は時間を持って余すことになった。私はそのことを前々から考えていて、ヨークシャー北部の州境にある僻地(それがどこであるか言う必要はない)を訪ねることにしていた。アンジェラと最初に逢ったのがその地の農家であったことから、そこは私にとって特に愛着のある場所だったのである。国外に出る前に冬の寒さに包まれたその地と別れを告げることを思って、私の鬱々とした気分も少しは紛れた。ここで言うっておかなければならないが、私の決意を完全に実行して後に戻れなくなる前に捜し出されるのを危惧して、私はその前夜、アンジェラにいつもと同じように手紙を書き、事情はそのうち分かってもらえると思いますが緊急の所用ができて——とても悲しいのですが、一週間か十日ほど思いがけず遠くに行かなくなりました、と告げた。

当時は北部鉄道がなく、乗合馬車とその代わりをしていた。他の人たちにもまま見られるように、私も今になってその乗合馬車が姿を消したことを嘆く振りをしたりしているが、当時はそれに乗ることを恐ろしい難行苦行として誰もが怯えていた。私は急行馬車の御者台の席を確保していて、フリート街に出て私のやることは、旅行鞆を持って辻馬車に乗り、大急ぎでそれを走らせてイズリントンのピーコック乗合馬車発着所に向かい、そこで予約した馬車に乗り込むことだった。しかし、私に代わって旅行鞆をフリート街に運んでくれる法学院の守衛の一人が、テムズ河に過去数日間巨大な氷の塊がいくつも漂っていて、夜間は河を埋めつくしていると話し、テンプル・ガーデンズからサリー側の河岸まで歩いて行けると言うものだから、私は御者台の席に乗っても、氷に閉じ込められて突然私の不幸のけりがつくのではないかと自問

し始めた。私はたしかに滅入ってしまったが、それでも凍え死にたいとまでは思わなかった。

ピーコック乗合馬車発着所——そこでは誰もが寒さを凌ぐために熱いパール<sup>1</sup>を飲んでいて——に着くと、私は内側の席が空いていないかと尋ねた。それで分かったのは、内側であろうと外側であろうと、私以外に乗客は一人もいないということだった。その乗合馬車がいつも満席状態だったことから、天候がいかに厳しく異常であるかを私は厭でも思い知らされた。それでも私はパールを少し口にして(それを飲むと、とても元気が出た)馬車に乗り込んだ。私が席に座ると、従業員が私の腰まで藁を積み上げてくれ、私は藁に埋もれた自分の滑稽な姿を意識しながら、旅立ったのである。

発着所を出たとき、まだ夜は明けていなかった。しばらくの間、幽霊のように淡く朧<sup>おぼろ</sup>に見える家々や木々が現れては消えて行き、それから暗く凍てつくような陰しい夜明けが訪れた。人々は家の火を熾<sup>も</sup>して、煙が希薄な空気の中にまっすぐ立ち昇り、馬車はハイゲイトの拱道に向かってがたごとと音を立てて進んで行ったが、かちかちに凍った地面に触れる蹄鉄の響は、生まれて初めて耳にするものだった。田舎に入ると、何もかもがどんよりとして、くすんだ感じだった。道や木々、田舎屋や農家の藁葺きの屋根、農家の中庭に積まれた干草、すべてがどんよりとくすんでいた。野外の仕事は放置され、道沿いの宿に置かれた飼葉桶はかちかちに凍っており、ぶらぶら歩く人影もなく、家の扉は固く閉じられ、通行税取立て門付きの家では中で赤々と火を焚いていて、子供たち(こうした仕事をしている人たちでも子供はいて、可愛がられているようだった)は、そのきらきらとした目で稀に通るかかる馬車を一目でも見ようと、その丸ぼちの腕で小さな窓ガラスを擦<sup>こす</sup>っていた。雪がいつから降り始めたのか定かではなかったが、どこかで馬を取り換えていることは分かった。車掌が、「高い空にいる老婦人が、今日はしこたま鷺鳥の羽をむしり取っているわい」と言う声が聞こえたからだった。実際、その時、白い羽毛のような雪がどんと降り積もっていた。

侘しい一日がだらだらと過ぎて行き、私は孤独な旅人の例に漏れず、うとうととまどろみながら時の流れに身を任せていた。何かを口にして暖かい飲み物を飲んだ後——特に食事をした後は、体が温まり元気も出たが、それはその時だけで常に寒さを覚え、気分が滅入っていた。私は時間と場所が常にぼんやりしてまごつき、常に正気を失いかけていた。馬車と馬たちが絶え間なく「オールド・ラング・ザイン」(「懐かしき昔」)を合唱しているようで、それが寸分の狂いもなく拍子を取って調子を合わせ、折り返しの前になるとその音がきまって高まるものだから、私は狂い死にそうになった。馬を取り換えている間、車掌と御者は道を行きつ戻りつしながら雪に足跡をつけていた。再び夕闇が訪れ、彼らは力づけの液体をどんと喉に流し込みながらもふらつくことなく立っていたが、その姿は立てて置かれている二つの大きな白い樽と見分けがつかなかった。馬たちが寂しい場所で転げて、それらを助け起こさなければならない破目になったが、私にはまたとない気分転換になった。それで体が暖まったからである。雪はどんと降り積もっていたが、それでも降り続け、一度も止むことがなかった。道中は一晩中そんな具合であった。こうして私たちは、さらに二十四時間ぶっ通しで「オールド・ロング・ザイン」の演奏に身を任せながらグレート・ノース・ロードを走り続けた。雪は降りしきり、

飽くことなく降り続け、一度も止むことがなかった。

二日目の正午にどこに着いたのか、そしてどこに着くはずであったのかは今では忘れてしまったが、予定より六、七十マイルは遅れていて、事態が刻々悪くなっていくのは分かっていた。吹き溜まりが異常なほど深くなり、道標は完全に雪に埋もれて姿を消していた。

道路と野原との境目がなくなり、道を示す垣根や生垣も見えない、恐ろしいほどに白く広がる雪面を馬車はさくさくと音を立てながら進んで行ったが、雪面が沈み込んで丘陵をそのまま転がり落ちる危険に常にさらされていた。それでも御者と車掌——二人とも御者席から離れず、常に意見を交わし、周囲にしっかりと目を配っていた——は、驚くほど鋭い感覚で進路を見極めていた。

町が視界に入ってくると、それは石版の上に雪の降り積もった教会や家々を石筆を惜しみなく使って描いた巨大な線描、そんな感じだった。町に入ると、雪で針が進めなくなった教会の時計がすべて止まり、旅館の看板が雪に埋もれていて、さながら白い苔が辺り一帯を覆い尽くしている感じだった。馬車はもう雪だるま状態になっていたし、町の外れまで馬車について走り、馬に発破を掛けたり雪で動かない車輪を回したりしている従業員やボーイたちも、まるで雪男のようになっていた。とうとう私たちは風の吹きすさぶ荒涼とした寂しい場所に置き去りにされたが、そこはさながら雪に覆われたサハラ砂漠のようだった。誰もがもう雪は勘弁して欲しいと思ったことであろう。それでも敢えて言うが、雪は飽くことを知らず、容赦なく降り続け、一度も止むことはなかった。

馬車は一日中「オールド・ラング・ザイン」を演奏し続け、町や村を出ると、鼯の足跡や野兎や狐、そして空を飛ぶ鳥の姿を時折り見かけるだけであった。夜の九時、ヨークシャーの荒野に差し掛かったとき、馬車の角笛が元気よく響き、私たちが迎える歓迎の話し声が聞こえ、明滅する角灯が動き回るのを見て、私はまどろんだ状態から目を覚ました。皆は馬を取り替えようとしていた。

私は手を貸してもらって馬車から降り、給仕に尋ねた。帽子を被っていない彼の頭は、あっという間にリア王のように真っ白になっていた。「ここは何という旅館ですか？」

「ヒイラギです」と彼は言った。

「こうなったらもう」と私は車掌と御者に詫びるように言った、「ここに泊るしかありません」

事態が事態なので、宿の主人、女主人、馬丁、それに郵便配達夫、そして馬の世話をする全ての人たちが、このまま先に行くのかと御者に尋ねていて、宿で働いている他の人たちも、みんな目を見開いて御者の答を待っていた。御者は、「ああ、彼女をこのまま走らせませよ」——彼女というのは馬車のことだった——「ジョージがついて来るならね」ジョージというのは車掌の名で、彼はどんなことになっても御者について行くとすでに誓っていた。それで助手たちが馬をすでに厩から出していた。

このやり取りの後、私は疲れきってもう駄目ですと打ち明けたのであるが、それは考えあぐねてのことだった。実際のところ、この話し合いで気楽に言い出せる状況になったお陰で、もともとはにかみ屋の私でも、臆することなくそれを切り出すことができ、実際に、車掌や御者

さえも、ここで泊る方がいいと言ってくれたのである。それで、私の気持ちを何度も伝え、その場にいた人たちがこの人は明日の郵便馬車でも先へ行くことができると口々に言ったり、また今夜このまま行けば凍り死にするだけで、人が凍死してもお釈迦になるだけ——ああ、生き埋めになればなおさらのことだ（「生き埋めになる」という言葉は、ひょうきんな助手が私を出しにした冗談で、皆に大いに受けていた）とか何とか言われたあげく、こちこちに凍ってまるで凍死した死体よろしく私の小型トランクが運び出され、私は車掌と御者にお礼を弾み、無事の道中を祈って別れの挨拶をし、それでも、彼らを待ち受けている難行苦行を知りながら、自分だけが残ることに少し恥じらいを覚えつつ、柊亭の主人、女主人、それに給仕の後について二階に上がって行った。

私が案内された部屋は、見たこともないほど大きいものだった。窓が五つあって、それぞれに暗紅色のカーテンが掛かっていて、部屋中の明かりを吸収している感じだった。カーテンの上端に飾り布が折り重なっていて、それが実に妙な形で壁のあちこちでくねくねとうねっていた。私はもっと小さな部屋にしてもらえないかと頼んだが、これより小さい部屋はないということだった。しかし、主人が仕切りをつけられますよと言って、古めかしい日本の屏風が持ち込まれた。それには、現地人（日本人だと思われる）が、さまざまな馬鹿げた事をして楽しんでいる絵が屏風いっぱい描かれていた。その後一人取り残された私は真っ赤に燃える暖炉の火に焙られて、丸焼けになりそうになっていた。

私の寝室は入口からかなり遠く離れていて、長い廊下の端にある大きな階段を上った所にあった。とても分かってもらえないであろうが、階段で人に逢うと、内気な者は恥ずかしくて尻込みしたくなるのである。それまで悪夢にうなされた部屋は多々あったが、こんな陰気な部屋で寝るのは初めてだった。調度は全て、寝台の四隅の柱から二本の古めかしい銀製の燭台に至るまで、いずれも丈が高く紡錘状をしていた。寝室から居間に出て屏風から顔を出して周りを見ようとすると、まるで狂牛のように風が吹きつけてくるし、肘掛け椅子にしがみついていると、暖炉の火に焙られてまるで窯から出した煉瓦のように顔が真っ赤に火照るのだった。炉はとても高い造りで、その上に映りの悪い鏡——表面が波打っているようであった——があって、私が立ち上がると、頭骸骨前部の骨相がやっと見えるだけだった——どんな人の骨相でもそうだが、眉の辺りで残りが急になくなると、それはけっして気持ちの良いものではない。私が暖炉を背にして立っていると、屏風の上やその奥に広がる暗くて陰気な天井が、やたらその方に私の目を向けさせようとするのだった。そして五つの窓のカーテンの垂れ飾りが、遠く薄暗い空間で、巨大な幼虫の群れのように絡まったり腹這ったりしているように見えた。

私は、自分が感じていることを、私と同じような性格をした他の人たちも内心感じているような気がしてならない。それ故、勇を鼓して言うが、旅をしていてある場所に着くと、私はすぐにそこから立ち去りたいと思うのである。夕食に出された焙った鶏肉と香料を加えて温めたぶどう酒を平らげる前に、私は朝出発する手筈を細かく給仕に飲み込ませた。朝食、それから勘定。貸し馬車を九時に。馬は二頭、もし必要なら四頭。

私は疲れていたけれども、夜は一週間ほどにも思われた。悪夢を紛らそうと私はアンジェラ

のことを考えたが、自分がグレットナ・グリーン<sup>2</sup>の間近まで来ていると思うと、すっかり気持ちが滅入ってしまった。グレットナ・グリーンなど私に何の用もないのだ。私はそこではなくアメリカに渡って破滅するのだ、と悲痛な思いで呟いた。

朝起きて分かったことであるが、一晩中降り続いた雪がまだ降りしきっていて、私はすっかり雪に閉じ込められていた。道が市場町の作業員によって切り開かれない限り、馬も人間も荒野のこの宿から出ることはできなかつたし、誰もそこに近づくことはできなかつた。彼らがいっせいで辿り着けるか、誰にも分からなかつた。

その日はクリスマス・イヴだった。どこにいても、クリスマスを悶々として過ごしていたはずなので、気が塞ぐのも仕方なかつた。しかし、雪に閉じ込められるとなると、凍死を覚悟しなければならず、それは思いもよらないことだった。私はとても寂しい気持ちになっていた。それでも私は、宿の主人や女主人に料理を一皿運んで来てくれるよう頼めないばかりか、一緒に過ごさせて欲しい(そうしたい気持ちは山々であったが)と申し出ることもできなかつた。こんな時、私が誰にも知られないようにしている秘密、つまり、はにかみ屋である私の本性がどうしても顔を出してくるのである。はにかみ屋の例に漏れず、私は他の人たちもまたはにかみ屋ではないかと考えてしまうのである。私は自分で頼み事をするのがとても恥ずかしく、自分から言い出したりしたら、相手がひどく当惑するのではないかとつい不安になってしまうのだ。

そんなわけで私は、寂しさに襲われながらも何とか気持ちを落ち着かせようと、宿にどんな書物があるかと給仕に尋ねてみた。給仕は『道案内』、二、三部の古新聞、薄っぺらな歌集、笑話集を手始めに、乾杯の音頭用の格言集、『ペリグリン・ピクル』<sup>3</sup>の半端本、それに『センチメンタル・ジャーニー』<sup>4</sup>まで持ち込んで来た。私は二つの小説はすでに隅々まで読んでいたが、もう一度それらを読み直し、あらゆる歌(「オールド・ラング・ザイン」にいたるまで)を口ずさみ、笑い話を全部読み通した——その笑いの中に、私の心の状態にぴったりした陰鬱なジョークがいくらかでも出てくるのであった。私はあらゆる乾杯の音頭を取り、あらゆる格言を声に出して言い、新聞をすべて読み通した。新聞には、つまらない広告、州税<sup>5</sup>、それに追剥ぎの記事ぐらいしかなかった。私は猛烈な読書好きだったので、これしきの読み物では夜まで持たず、お茶の時間までに気晴らしの種が尽きてしまった。それで自分で気を紛らすしかなく、私は一時間ほど次に何をしようかと考えながら時間を潰していた。最後に私はふと思いついて(アンジェラやエドウィンのことはどうしても考えたくなかつた)、これまでの旅館での経験の記憶を辿って、それでどれだけ時間が潰せるかやってみることにした。私は炉火を掻き熾し、屏風の片側に椅子を少し寄せ——風が私を待ち構えて急襲することが分かっている、その時も唸り声をあげているのが聞こえたので、炉からあまり離れる気はしなかつた——記憶の糸を辿り始めた。

旅館での私の印象はまず子供部屋に端を発している。で、私はその糸口として子供部屋に戻って行くと、私は、鉤鼻でどんよりした眼、黄ばんだ顔をして緑色のガウンを羽織った乳母の

膝元に座っている。彼女の十八番は、路傍の宿の亭主にまつわる陰気な話で、その宿を訪れた泊り客が長年に亘って謎のように姿を消していたが、やがてその亭主が客を原料にしてパイを製造していることが分かったというものであった。このパイの製造効率をさらに上げるために、彼はベッドの枕元の背後に隠し戸を作り、泊り客が(パイをたらふく食べて)ぐっすりと寝込むと、この邪悪な亭主は片手に角灯を、もう一方の手に短刀を持って、その扉からそっと中を窺い、客の喉を搔っ切り、その客をパイにしていたのである。彼はパイを作るためにはねあげ戸の下に、常に煮え立っている銅釜を用意していて、草木も眠る丑三つ時にパイの皮を平らに伸ばしていた。しかしそんな男でも良心の呵責に苛まれてか、眠りに就く際にきまって「胡椒を入れ過ぎたか!」と呟いていて、それが結局は法の咎を受ける因となったのである。この人非人の話にけりをつけると、すぐに同じ時期の別の無法者が姿を現した。この男の仕事はもともと押し込み強盗であったが、その技を究めていくうちに、ある晩窓から押し入ろうとしていたとき、勇敢で美しい女中(鉤鼻をした乳母はその女中の容姿について聞かれても詳しく答えようとしなかったが、それが自分であるといつも思わせぶりにほのめかしていた)によって右耳を切り取られていた。数年後、この勇敢で美しい女中は田舎の旅館の亭主と結婚したが、その亭主には奇妙な癖があって、彼は常に絹製のナイトキャップを被り、どんなことがあってもそれを脱ごうとはしなかった。やがて、ある夜、彼がぐっすりと眠り込んだのを見計らって例の勇敢で美しい女がナイトキャップの右側を持ち上げてみると、そこには耳がなかった。女は、男が耳を切り取られた強盗で、殺す魂胆で自分と結婚したのだと鋭く見抜いた。彼女は火搔き棒を熱して彼の悪事にけりをつけた。その手柄により、彼女はジョージ国王陛下に謁見する栄に浴し、その立派な分別と勇氣に対して国王からじきじきにお褒めの言葉を頂戴した。その同じ話し手は、とことんまで私の正気を失わせ、私を怯えさせることに残忍な喜びを抱いていると私は長い間信じていたのであるが、さらに自分自身の経験による嘘偽りない話だと言って、別の小話を用意していた。それは、今思うと、『レイモンドとアグネス、血を流す尼僧』<sup>6</sup>を種にした作り話だった。彼女の話では、その恐ろしい出来事が彼女の義理の兄の身の上で起こったという。その兄は大変な金持ちで——私の父はそうではなかった——とてつもなく背が高かった——私の父はそうではなかった。彼女の親戚と比べて蔑まれるような境遇にある私の大切な親戚や家族を私の幼い心に印象づけることが、この鬼のような女がいつも使う手だった。この彼女の義理の兄が、ある時素晴らしく立派な馬(私たちの家にはそんな立派な馬はいなかった)に跨って、後ろに重宝な愛犬であるニューファウンドランド犬(私たちは犬を飼っていなかった)を従えて森を抜けていたとき、行き暮れてしまい、ある旅館に何とか辿り着いた。色浅黒い女が扉を開けると、彼は泊りたいのだがベッドは空いていますか、と尋ねた。女は空いていますよと答えて、馬を厩に入れ、二人の浅黒い男のいる部屋に彼を案内した。彼が食事をしてると、その部屋にいた鸚鵡がおしゃべりを始めて「血だ、血だ! 血を拭き取れ!」と口走った。すると浅黒い男の一人が鸚鵡の首を捻り、私は鸚鵡の蒸し焼きが好物でこいつを明日の朝食にしますよ、と言った。たっぷり飲み食いした後、大金持ちで背が高くてすらっとした義理の兄は床に就いた。しかし彼は不安に取りつかれていた。部屋に犬は連れ込めないというこ

とで、厩に入れられていたからである。彼は一時間以上もじっと座ってどうしたものかと考え続けていたが、ろうそくの火がまさに消えかかったとき、扉を引っ掻く音が聞こえてきた。扉を開けると、そこにいたのはニューファウンドランド犬<sup>7</sup>だった！ 犬はそっと入って来て、彼の周囲を嗅ぎ回り、藁が少し置かれている部屋の隅——浅黒い男たちは林檎に被せていると言っていた——にまっすぐ向かい、藁を引き剥がすと、出てきたのは血に染まった二枚のシーツだった。その瞬間、ろうそくの火が消え、義理の兄が扉の隙間から見ると、二人の浅黒い男が忍び足で上がって来る場所だった。一人が刃の長い短剣（五フィートほどもあった）を持ち、もう一人が斧と頭陀袋<sup>8</sup>それに鋤<sup>9</sup>を携えていた。この恐ろしい話の結末がどうなったのか私には記憶がない。おそらく、話をここまで聞くと私の感覚機能が恐怖でいつも凍りついてしまい、ものの十五分ほど聞く能力が麻痺してしまったためだと思う。

終亭の炉辺に座ってこうした野蛮な話に思いを馳せているうちに、私が若かりし頃、六ペンスの安本で評判を取った「路端の宿屋」のことが頭に浮かんできた。その本は折りたたみの図版がついていて、それには中央の卵形の部分に宿の亭主のジョナサン・ベッドフォードの肖像が描かれていて、四隅のスペースには、その名前に結びつく四つの悲劇的事件が描かれていた——それは絵の具を節約すると同時に自由気儘な手法で彩色されていて、ジョナサンの顔に塗られたばら色はそのまま馬丁のズボンに溶け込み、隣の区分にまでその色が及んで、瓶に入ったラム酒までがばら色になっていた。それから私は、亭主が、自分のナイフが足元に転がり、手に血をつけたまま殺された旅人のベッドの傍らに佇んでいる様子、そして亭主が、旅人を殺して鞍袋を盗るために実際に部屋に侵入したことは確かであるが、旅人がすでに殺されているのを見て愕然としたと抗弁したこと、そして数年後に馬丁が殺人の罪を自白したという結末が思い浮かんできた。ここまで思い出してくると、私はすっかり落ち着きを失ってしまった。私は火を掻き熾し、熱さに耐えられなくなるまで火を背中にして立ち、屏風の背後の闇、そして「勇敢なアロンゾウと美しいイモーゲン」<sup>8</sup>という民話に出る芋虫よろしくゆらゆらと前後に揺れるカーテンを見上げていた。

私が学校に通っていた門前町に、ある宿屋があった。この宿には、他の宿と比べて楽しい思い出がある。次に思い浮かんだのはその旅館だった。親戚がそこによく泊っていたことから、そこで両親に逢って鮭や鶏肉を食べ、よく酒を飲んだ記憶がある。そこには聖職を示す看板——司教冠——が掛かっている、司教館にも劣らないと思われる素晴らしい酒場があり、とても居心地が良かった。私は主人の末娘に首っ丈だった——だが、そのことは大目に見ていただきたい。この旅館で、私はそのばら色の顔をした可愛い娘に泣かれたことがあった。私が喧嘩をして目のまわりに黒いあざをつくったからである。私が終亭で過ごした夜には、もう長い年月が経ち、彼女は私のために流した涙を忘れてどこかに行ってしまうていたが、その司教冠の宿のことを思うと、今でも心が和むのである。

「続きは明日にしよう」と言って、私はろうそくを手にしてベッドに向かった。しかし横になっても、その夜はベッドが勝手に私の思考の流れを受け継いで、魔法の絨毯よろしく私を遠くに（と言ってもイギリス国内であるが）運んで行き、数年前に実際経験したように、私は駅

馬車に乗って雪の降り積もった別の宿に降り立った。私はこの宿で実際にあった奇妙な出来事を夢で何度も見ていた。私は旅の途中でその宿に泊ることになったのであるが、その一年以上前に、ごく親密な友人と死別していた。それから毎晩のように、家でも外泊先でも、その友人のことを夢に見ていた。時にはまるで生存しているように、時には私を慰めるために黄泉の国から戻って来た様子で、そして常に美しく、穏やかで、幸せそうで、不安とか苦しみとはまったく無縁の感じだった。それは、広漠とした荒野にあるうら寂しい宿で、旅の途中で私はそこで一晩過ごしたのである。寝室の窓から、月が皓々と照る果てしない雪原に目をやった後、私は炉火の傍に腰を下ろして手紙を書いた。私はその時まで、天に召された愛しい女性<sup>ひと</sup>が毎晩のように夢に現れることを誰にも話さず、私ひとりの心に秘めていた。しかし、その手紙で私は事情を包み隠さず述べ、旅に疲れ、辺鄙<sup>びつ</sup>な場所にいる私の夢の中に、なおもその女性が忠実に現れてくれるかどうかぜひ確認したいと思っている、と付け加えた。私の思いは挫かれた。秘密を人に洩らすことによって、私は愛しい幻に逢えなくなってしまったのである。それから十六年の歳月が経ったが、眠りの中でその幻に逢えたのは一度きりだった。その時、私はイタリアにいた。目を覚ますと(自分ではそんな感じだった)、聞き慣れた声ははっきりと耳に入ってきて、私はその声に語りかけ、それが私のベッドの上に浮かび上がって古めかしい部屋のアーチ型の天井に舞い上がったとき、「未来の人生」について私が尋ねたことに答えてくれるよう求めた。それが姿を消したとき、私の両手はその方に差し上げたままであったが、その時、庭の塀付近でベルの鳴る音、それに真夜中のしじまの中で誠実な全ての信者に向かって、亡き人たちの冥福を祈るよう呼びかける声が聞こえてきた。万霊節<sup>9</sup>の宵だったのである。

終の宿に話を戻そう。翌朝目を覚ますと、凍てつくような寒さで、険悪な空を見上げると今にもまた雪が降ってきそうであった。朝食が片づけられると、私は椅子をもとの場所に戻し、外よりも炉火の暖かさに引かれて薄暗い場所に座り、旅館にまつわる私の記憶をまた辿り始めた。

頭に浮かんだのは、私が一度泊ったことのあるウィルトシャーにある立派な旅館で、苦味のあるウィルトシャーのエールが飲まれていた時期で、ビールにはまだ苦味がなかった頃のことだった。その宿はソールズベリ平原のはずれにあって、深夜の強風が部屋の格子窓をガタガタと鳴らし、ストーンヘンジから呻き声を立てながら、私を目がけて吹きつけていた。その宿には居候<sup>いそうろう</sup>(まさにドルイド教の祭司<sup>10</sup>といったところで、不思議な力で生き残り、なおも謎めいた存在だった)がいて、彼は長い白髪、それに常にはるか彼方<sup>かなた</sup>を見ているような表情のない青い目をしていて。彼は自分がかつて羊飼いをしていたと言い張っていて、遠い昔から肉にされてしまった羊の亡霊が、群れとなって地平線に現れるのをずっと見張っているようであった。彼は預言者めいた信念を持っていて、ストーンヘンジの石柱を二度数えるとしたら、誰が数えても二度とも同じ数にはならないと言ったり、さらに誰でもその数を三度繰り返して九度数え、石柱群の真ん中に立って、「掛かって来い！」と言うなら、恐ろしい幻を見て打ち殺されることになる、と言ったりしていた。彼は以下に述べるような経緯<sup>がん</sup>で雁を見たと言い張っていた(出逢ったのはドーデー<sup>11</sup>ではないかと思われるのだが)。彼は晩秋のある日、平原にいたとき、何

者がかひよこひよこと妙な足取りで彼の前を進んで行くのをぼんやりと認めた。最初彼は、それがどこかの乗り物から吹き飛ばされてきた幌ではないかと思ったが、すぐにそれが小さな馬に跨った痩せっぽちの小人だと確信した。しばらくそれについて行ったがなかなか追いつけず、何度呼びかけても返事がないまま、彼は何マイルもそれについて行ってやっと追いついたとき、彼はそれが大英帝国に最後に残った雁であることを知った、ということだった。それが羽を失った哀れな姿で、ドードーのように地面を駆け続けていたという。捕まえてやろう、それでやられてもいいと臍<sup>はら</sup>を固めて、彼はその雁と取っ組み合ったが、そいつはぜったいに捕まるものかと躍起になり、彼を投げ飛ばして気絶させ、西の方角に姿を消し、それが見納めになったという。この預言者は、輪廻の過程で夢遊病者か狂信者、あるいは追剥ぎだったのかもしれない。しかし、私がある朝目を覚ましたとき、彼は暗がりの中で私のベッドの傍らに立ち、恐ろしい声でアタナシウスの信条<sup>12</sup>を繰り返していたのである。私は宿賃を払って、その土地からあたふたと退却した。

私が滞在したことのあるスイスの小さな宿で起きた出来事の顛末は、やたらに経験できるものではなかった。それは細いジグザグの道が一本走っている山間<sup>やまあい</sup>の村にある素朴な宿で、部屋に辿り着くには、牛小屋を抜けてラバや犬や家禽がたむろしている場所を通り抜けた表口から、大きくて殺風景な階段を上がって行かなければならなかった。寝室はすべて白木造りで、漆喰も塗られず壁紙も貼られていなかった——粗木で作った荷箱、そんな風情だった。宿の外に目をやると、だらだら伸びる道、赤銅色の尖塔のついたちっぽけな玩具<sup>おもちゃ</sup>のような教会、松林、急流、霧、それに山腹が見えるだけだった。この旅館で働いていた若者が八週間前に姿を消して(時期は冬だった)、どこかで人知れず恋に落ち、兵士になったと思われていた。彼は夜中に起きて、他の人物と寝泊りしていた屋根裏部屋から村の道に飛び降りていた。彼が音一つ立てず姿を消したため、彼の仕事仲間は、朝になって目を覚まして、「ルイス、ヘンリは？」と言われても、夜中に何かが動く音をまったく聞いていなかった。あちこちと探し回ったが彼は見つからず、皆は搜索を諦めていた。さて、この旅館の外に、村のどの家でも見られるように薪が積み上げられていた。しかしこの旅館の薪は、村でいちばん<sup>うすなか</sup>堆く積まれていた。村では旅館が最も裕福で、惜しみなく薪を燃やしていたからである。皆が彼をあちこちと探し回っていたとき、誰もが異変に気づき始めた。この旅館が飼っている一羽の矮鶏<sup>ちびどり</sup>が、えっちらおっちらと薪の山の天辺まで登って、何時間も何時間もそこに留まったまま、今にも体が張り裂けんばかりに鳴き続けていたのである。五週間——さらに六週間——が経ったが、この恐るべき矮鶏は飼主の事情にはお構いなく、その薪の山に常に登り、目の玉が飛び出さんばかりに鳴き続けていた。こうした事態になるまで、この恐るべき矮鶏に対する激しい憎悪がルイスの心に明らかに鬱積していた。ある朝、彼はその憎悪に駆り立てられて、ごつごつした棒切れを掴み、罵詈雑言<sup>ぼりごん</sup>を浴びせながら、それを薪の山の上で鳴いている恐るべき矮鶏に向かって投げつけ、矮鶏は死んで落下してしまった。その光景は、小さな窓の傍らに座って甲状腺腫を陽射しの中で手当てしていたある婦人が目撃していた。彼女は、はっと気がついて、忍び足で薪の山の背後に回り、こうした女のご多分に洩れずよじ登るのはお手のものだったので、裏側からよじ登ってす

ぐに天辺に姿を現し、金切り声を上げて中の隙間を見下ろし、「ルイスを捕まえて！ 人殺し！」と叫び、「鐘を鳴らしてちょうだい、死体があるのよ！」と甲走った声を上げた。私はその日、その人殺しを見た。そして柵の宿の炉辺に座っていた時にも彼の姿を見た。牛たちの吐く白い息が湯気のように立ち昇り、その穏やかな目が見つめる中で、紐で縛られて寝藁の上に横たわって警察に連行されるのを待っていた彼の姿、そしてそれを恐怖の眼差しで見つめていた村人たちの姿が、今でも心に浮かんでくる。鈍重な生き物——厩の中で最も薄のろな生き物——愚鈍な頭脳、まったく感性のかけらも窺えない顔をしたこの男は、主人の金をいくばくか猫ばばしたのであるが、それを殺された若者に見られていて、自分の罪を声高に咎め立てする矮鶏を上述の手段で片づけられると思っていたのである。翌日、このむっとりとした人でなしは、捕まった以上、あとは勝手にするがいいといった態度でいっさいを白状した。私は宿を発った日に、もう一度彼の姿を目撃した。そのキャントンの村では、死刑執行人は今でも刀で務めを果たしている。私がこの人殺しに出くわしたのは、小さな市場に設けられた処刑台で、彼は目隠しの布を巻かれて椅子に縛りつけられていた。私がおの場に着いた途端、大きな刀（刃の太い部分に水銀が詰められていた）が疾風あるいは烈火の如く彼の首に振り下ろされ、彼はこの世の者ではなくなっていた。驚いたのは、彼があつと言う間にあの世に送られたことではなく、あの恐るべき鎌状の刃から、半径五十ヤード以内にいるどの人物の頭も刈り取られなかったことである。

私はモンブランのすぐ近くに滞在していたとき、陽気な女主人と正直者の亭主が経営する立派な旅館に宿泊した。その旅館の一室には動物の絵が描かれた壁紙が張られていたが、動物たちは実に見事に継ぎはぎがされていて、虎の後ろ足と尻尾を持っている象がいれば、ライオンが象の鼻や牙をしていたり、熊がいわば毛が生え変わって体の一部が豹のようになつたりしていた。私はその旅館で幾人かのアメリカ人と知り合ったのであるが、彼らの誰もがモンブランのことをマウント・ブランクと言っていた——ただ、人付き合いのいい陽気な人物がいて、彼はモンブランとすっかり馴染みになって、馴れ馴れしくそれを「ブランク」と呼んでいた。朝食の時に、「今朝はブランクがとても高く見えますな」と言ったり、夕方、中庭で首を捻りながら、皆さん、登り始めて二時間でブランクの頂上に立とうとする気概のある者はわが国にはいないのではありますまいか——はてさて！　と言ったりしていた。

ある時、私はイングランド北部の旅館で二週間ほど過ごしたことがあって、そこでばかでないパイの幻につきまといわれた。それはヨークシャーパイで、まるで砦——中が空洞の廃れた砦——のようだった。しかし、給仕はどんな食事でも食卓の上にそのパイを載せなければ格好がつかないという固定観念を持っていた。数日後、私は幾つかの手段をそれとなく実行して、パイは要らないという私の思いを暗に示そうとした。たとえば、パイの中にグラスに飲み残したワインを空けたり、パイを籠に見立ててその中にチーズの皿やスプーンを突っ込んだり、冷却器よろしく中にワインの瓶を入れたりした。しかし、何度やっても甲斐がなかった。パイはその度にきれいに中身が空けられ、何事もなかったように相変わらず食卓に出されたからである。ついに、私は根も葉もない幻影に取りつかれているのではあるまいか、あるいは想像が生んだ

パイの恐怖で心身がおかしくなりつつあるのではないかと不安を感じて、それから三角形をした一片を切り取ったが、それは大きなオーケストラで使われる同名の楽器（トライアングル）ほどの大きさだった。人間にその結果を予見するすべはない——が、給仕はパイを修復したのである。即効性の接合剤を用いて、彼は三角のパイ皮を欠けた部分に見事に嵌めこんだのである。私は勘定を払って、そそくさと宿を後にした。

柊亭は陰鬱な趣を呈してきた。私は歩いて屏風の向こう側に遠征し、四つ目の窓の所まで歩を進めたが、そこで激しい風を受けて引き返さざるを得なくなった。私はまた冬籠りの場所に戻って火を掻き熾し、別の旅館に足を向けた。

その旅館はコーンウォールでも最も辺鄙な土地にあった。私と私の連れが夜になってその旅館に辿り着くと、その前で年に一度の炭鉱夫の祭が盛大に催されていて、荒っぽい群集が松明に照らされて踊っていた。私たちはそこから数マイル離れた石ころだらけの湿地帯で立ち往生してしまい、私は馬具をつけていない早馬の手綱を引く榮譽を担っていた。今どなたであれこの文をお読みになれば、引き革を脚の辺りに垂らしているでっかい早馬の轡くつわを取り、その馬を止め手綱を引いて百五十組のカップルが踊っている田舎踊りの真只中に連れ込んでいただきたい。そのつもりになって、そしてその情景を想像していただいて初めて、その馬が手綱を引く者のつま先を再三に亘って踏んづける様が、手に取るように分かっていただけのはずである。かてて加えて、馬が自分の周りをぐるぐる回っている三百人もの人に圧倒されてか、後足で立ったり、導き手の体面や自尊心など知ったことかと、後足でこちらを蹴ったりするのである。常ならば堂々と振舞えるはずなのに、それに水を差された格好で、私はコーンウォールの宿に辿り着いたのであるが、それを見て、コーンウォールの坑夫たちは目を丸くして驚いていた。宿は満員どころか超満員で、馬以外は泊めてもらえなかった——立派な馬を厄介払いできて、それだけは有り難かった。旅仲間と私とその夜を、そして翌日陽気な鍛冶屋と陽気な車大工が沼地に行って馬車を修理するまでの時間を、どうやって過ごしたものかと話し合っていたとき、群衆の中から一人の正直そうな顔をした人物が進み出て、私の家の同じ階に部屋が二つ空いているので、それを提供しましょう、夕食にはベーコンエッグとエールそれにポンチを出します、と申し出た。私たちが喜んで彼の後についてその家に行くと、それは思いもかけないほど清潔な家で、誰もが心行くまでもてなされた。しかしそのもてなしは一風変わっていて、主人は椅子職人で、その主人から勧められた椅子はただ骨組だけでまったく座部らしいものがなく、私たちは鳥のように止まり木に止まって夜を過ごす破目になった。事はそれだけで済まず、さらに情けないことになってしまった。くつろいで夕食を取っていたとき、私たちの一人が異常な状態で腰掛けているのを忘れてどっと笑い転げ、あつと言う間に沈没してしまったのである。私自身は、ろうそくの明りの中でベーコンエッグを食べている最中に柈にはまってVの字状に身体が折れ曲がってしまい、どうもこうもできないまま、無言喜劇の道化さながら木柈の中から五度も引き上げてもらわなくてはならなかった。

柊の宿にいと、孤独感がどんどんと心に押し寄せてきた。雪の中から掘り出されるまで、思い出の種が尽きてしまうのではないかと、私は不安を覚え始めた。ひよっとしたら一週間――

—いや何週間も——ここに閉じ込められてしまうのか！

私はある夜、ウェールズとイングランドの境にあった美しい小さな宿に泊ったのであるが、それにまつわる不思議な話があった。その宿の大きな寝室で起こったことであるが、その部屋にはベッドが二つ置いてあって、片方のベッドを使っていた人物が服毒自殺をし、もう一つのベッドでは疲れた旅人が異状に気づくことなく眠っていた。この事件が起こってから自殺が行われたベッドは一度も利用されず、もう一つは絶えず使われていた。使われていない寝台の床架は寝具を載せないでその部屋に置かれていたが、それ以外は以前の状態のままであった。伝わっていた噂によると、この部屋で眠った人は誰でも、たとえこの土地に多少は縁がある人でも、朝になって階下しもたに下りて来ると、アヘンチンキの臭いがして、自殺したいという思いにずっと取りつかれていた、と判で押したように言うのだった。泊る者が誰であれ、その人物は誰かと話を交わすことがあれば、決まってその話を持ち出すのだった。こうした状態が数年続き、亭主は不要な寝台をやむなく階下に下ろし、何もかも——ベッドや掛け布など——丸ごと燃やすことにした。妙な影響（そうした噂が流れていた）は以前より弱まったが、その後は変わることなく尾を引いていた。その部屋に泊った者は、ごく稀に例外はあったが、朝、階下に下りて来て、夜中に見て忘れた夢を何とかして思い出そうとするのだった。その人物が思い出せなくて困っていると言うと、亭主はヒントになるものをあれこれと言ってやる。が、当人にはどれも夢とは無関係だと分かっている。しかし亭主が「毒」と言った途端、泊り客はぎょっとして「それです！」と叫ぶ。宿泊人はきまってそのヒントに反応するが、夢の内容はそれだけしか思い出せない。

こうした思い出を辿っていると、目の前に一般的なウェールズの宿屋が浮かんできた。丸い帽子を被った女たちがいて、白い顎鬚を生やしたハーブ奏者たち（立派な風采はしていたが、詐欺師もどきだった）が、私が食事をしているとき、隣の部屋でハーブを奏でていた。その旅館から、私の心はハイランドの旅館へと自然に移っていき、そこで味わったオートミールのパン、蜂蜜、鹿肉のステーキ、湖で獲れたニジマス、ウイスキー、それにおそらくアトルブローズ。（その材料はいかにも心をそそるようにすぐ傍に置かれていた）などが記憶に甦よみがってきた。ある時、私は歴史上でも有名な荒涼とした谷間谷間にある駅馬車発着所ですぐにでも馬を取り換えるために、スコットランドの高地地方から大急ぎで南に向かっていった。発着所に着くと、目に映ったのは望遠鏡を手にして現れ、遥か彼方あそこにいる馬を見渡している亭主の姿で、それを見た私たちは呆然としてしまった。馬たちと言えば、せっせと草を食んでいて、四時間足らずの間、ずっとそこから動くことはなかった。ニジマスが心に浮かんできたところで、その連想によって私の心はすぐにイングランドの釣人が泊る宿（私は夏の間中、舟の底に寝そべて数知れないほど釣りの妙技を体験した。私は辛抱に辛抱を重ねて釣り糸を垂らすだけでこれといったことはしなかったが、大体から言って、魚を釣るにはその方が一流の道具や最高度の技術に劣らないほど効果的だった）に向かった。それから川、渡し場、緑に包まれた小島、教会の尖塔尖塔、鄙ひなびた橋が見渡せる舟宿の、植木鉢が飾られ白く壁が塗られた清潔で快適な寝室に入って行った。給仕をしていたのは明るい瞳をして可愛らしく微笑む比類なきエマだった。彼女は純朴な美し

さを具えていて、あの「青髭」<sup>1</sup>でさえ彼女には手が出せなかったことだろう。エマに祝福あれ！ 冬の宿の暖炉の火に目をやっていると、次に明るく燃え盛る石炭の炎の中に、イングランドにある二十余りの素晴らしい宿場の情景が見えてきた。今ではそれらの宿場が消えてしまったのを誰もが悲しんでいる。そうした宿はとても大きく居心地が良かったが、イギリス人が略奪と強欲に屈服したことを示すただの記念物になってしまった。こうした宿場が衰退して行くのを自分の目で確かめたいと思われるなら、ベイジングストウク、あるいはウィンザーからでもハウズロウ経由でロンドンまで歩き、滅び行く遺物を見て現実を実感されるとよいだろう。厩はぼろぼろに崩れて塵に帰り、住む家のない労働者や浮浪者たちが納屋で寝泊りし、中庭には雑草が生い茂り、以前は数知れないベッドに羽毛の布団が掛けられていた寝室は週十八ペンスでアイルランド人の間借り人に貸し出され、ちっぽけで薄汚いビール売り場はありし日の酒場の中でさらに縮こまり、馬車置場の離れ屋の門は薪代わりに燃やされ、その二つの窓の一つは鉄道と闘って罰を受けたかのように壊されて痛々しい姿を晒し、煉瓦造りの、鱗脚<sup>2</sup>でずんぐりとしたブルドッグが戸口で番をしている、そんな光景を目にされるはずである。暖炉の火の中にごく自然に見えてきたのは、地方の陰気な駅付近に新しく建てられた当時の鉄道宿である。酒樽から特に出るものと言えただの冷たい空気と湿気、食料置場にあるものを強いて挙げれば塗りたての漆喰、そして玄関の広間にいかにも客があるように見せかけて置かれている荷物だけだった。それから思い出の中に浮かんできたのはパリの旅館だった。蟻で磨かれた百七十五段の階段を上ったところに四室を備えた貸間があり、自分自身は別として誰もの心や体を煩わすことなく一日中呼び鈴を鳴らす特典を与えられていて、価格のわりに食事はつましいものだった。次に浮かんできたのは、フランスの田舎の旅館で、中庭の上空に教会の立派な尖塔が聳えていて、鈴をつけた馬が快い音色を奏でながら向こうに見える通りを行き来し、全ての部屋にそれぞれ違った種類の時計が掛けられていたが、それらの時計はすべて時刻がまちまちで、正確な時を刻むことがあるとすれば、たまたまちょうど十二時間進んだりちょうど十二時間遅れたりして、時計の針が図らずも正しい時刻と合った時だけのように思われた。

私の心はその旅館を去って、今度はイタリアで泊った貧相な路傍の宿に向かった。その宿には全ての汚い服（着用されていない）が寝室の控えの間に常に置かれていて、夏には、蚊が顔にとまってそれが葡萄をまぶしたプディングのようになり、冬には刺すような冷気で顔が青ざめ、必要なものがなかなか見つからず、なければ諦めるしかなく、急須がないため、暖かいダンプリングの中でお茶がもう一度煮立ってくれたら、と思ったりする。それから明るい陽光の射す地方の町や都市にある宮殿のように贅を尽くした由緒ある旅館や古い修道院の宿。重厚な方形の階段があって、林立して聳える柱の先に青天井が見える。豪華な宴会場、広々とした食堂、複雑に入り組んで幽霊でも出そうな寝室、それぞれの部屋から見える現実感も実在感もない華麗な街路。次はマラリア地区にある狭苦しい小さな旅館。接客係は青ざめた顔をしていて、換気をしないために独特の臭いが内にこもっている。それから、ヴェニスにある信じられないほど広大な旅館。下に見える運河でゴンドラの船頭が角を勢いよく回る時に上げる掛け声、鼻柱の特定の箇所<sup>3</sup>にこびりついて離れない水の臭い（この町に滞在している間、けっして離れる

ことはない)、深夜の時を告げるサンマルコ寺院の大きな鐘。次に、ライン川沿いにある落ち着きのない旅館にしばらく滞在する。そこでは、誰かが時刻にお構いなく床に就くたびに、それが目覚ましになって他の全ての泊り客を起こしてしまう。その旅館の長い食卓(その向かい端に、バベルの塔さながら、白い皿がいくつ積み上げられている)、汚れた身体に装身具をつけただけで他には何もまとっていない一塊に集まった小太りの男たちが、一晩中その場から離れようとはしないで、グラスをカチャカチャ鳴らしたり、流れる川や実る葡萄や時を紛らしてくれる葡萄酒のこと、そしてライン河で男たちに微笑みかけるローレイのことを歌ったり、私の友人を祝して景気よく乾杯したり、私の兄弟のために杯を上げて賑やかに健康を祝したり、その他何でもかでもやってのける。私は、もちろん、その宿をそそくさと後にし、ドイツの他の宿に足を向ける。その宿では、全ての食料が水気を帯びていて、風味も何もあったものではない。熱々のプディングが突如として現れたり、茹でたサクランボ、板菓子が食事の最中に不意に出されたりして、ひどく面食らったりする。ハイデルベルグなどにある学生で賑わうビール店の窓を通して、ガラス製のジョッキで泡立つ発泡性のビールを飲んだ気になり、挨拶がてらちらっと中を覗き、海を渡ってアメリカのホテルに向かう。どのホテルにも四百のベッドがあり、八、九百人の紳士淑女が毎日のように晩餐を楽しんでいる。私は再びそのホテルの酒場に佇み、コブラー<sup>15</sup>、ジュウレップ<sup>16</sup>、スリング<sup>17</sup>、あるいはカクテルを飲んで夕べの時を過ごす。私は再び友人の將軍の言葉に耳を傾ける——知り合って五分の間に、彼のお陰で私は二人の少佐と生涯の友になり、今度はその少佐たちの紹介で私は三人の大佐と<sup>かんけい</sup>刎頸の交わりを結び、さらにその大佐たちによって二十二人の軍属と兄弟の契りを結んだ——繰り返すが、私は再び友人の將軍の言葉に耳を傾ける。彼は悠揚とした口調でホテルの施設について説明する。こちらが紳士が朝過ごす居間です、サー。ご婦人方が朝過ごす居間です、サー。紳士が晩餐後に過ごす部屋です、サー。ご婦人方が晩餐後に過ごす部屋です、サー。紳士淑女が晩餐後に共に過ごす部屋です、サー。音楽室です、サー。読書室です、サー。四百以上ある寝室です、サー。この土地にあった古い建物を取り壊してから十二ヶ月以内で、十全の設計のもとに五十二万ドルの費用で完成したものです、サー。ここでまた個人的な感想を言わせてもらえるなら、施設が立派で豪華であればあるほど、そして金をかければかけるほど、魅力が薄れる気がするのである。それで、私はさらにコブラー、ジュウレップ、スリング、あるいはカクテルで乾杯し、友人となった將軍、私の友人たち、少佐たち、大佐たち、そして軍属に対して、心からの友情を表明した。私が目を皿にして、彼らの些細な欠点を見つけ出したとしても、彼らが寛大で、<sup>きつぱ</sup>気風のいい、立派な人たちであることを、私は百も承知している。

近頃、私は孤独感をむやみに追っ払おうとしてきた。しかしこの宿で、私はもう立ち直れないほど心が挫けて、それはできぬことと諦めてしまった。どうすればいいのだろうか？ 私はどうなるのだろうか？ このままだったらどこまで沈んで行くことになるのだろうか？ トレンク男爵<sup>18</sup>のように、<sup>ねずみ</sup>鼠か<sup>くも</sup>蜘蛛を探し、それを見つけて飼い馴らし、幽閉の憂さを紛らしたものでしょうか？ そうしても、先の見通しがますます暗くなってしまうだけだろう。私がこんな苦境に追い込まれていたとき、雪を切り開いて道が使えるようになり、宿を去る際に私はどっと

涙が溢れそうになり、まるで年老いてバステューユ監獄から釈放される囚人のように、五つの窓、十張のカーテン、そして波状の垂れ布のある部屋にもう一度連れ戻して欲しいと懇願したい気持ちであった。

私は絶望的な思いにとらわれた。別の事情であったなら、私は宿を出ることを断固拒んでいただであろう。しかし、切羽詰まっていた私は、藁をも掴む思いで成り行きに従った。私は生来の内気な気持ちに打ち克って、宿の主人が出してくれた食事を取ったり宿に泊っていた人たちと交わったりすることに尻込みをしないで、靴磨きを呼び、椅子に座るよう頼み——何か飲み物を勧め——話を求めるようなことができるだろうか？ できたのである。そうせざるを得なかった。実際にそうしたのである。

## 第二の枝

### 靴磨き

これまでどこにいたのですかって？ 私が尋ねる度に、彼はこう応えた。いや、あっちこっちと至る所でさあ！ 何をしてきたのですか？ いやまあ、あなたさまが思いつく限りの仕事は何でもかでも！

色々と見てきたのですね？ もちろんでさあ。彼が目にした二十分の一くらいしか分かっていなくても、私はその通りであろうと納得した。いや、見たことよりも見ていないことを言う方が楽だと思いますね。ああ！ 大したもの、その通りだったのである。

これまで見た中でいちばん珍しかったのは？ 珍しい！ そいつは分かりませんな。今まで見た中でいちばん珍しいものを言えと言われても、すぐには無理です——一角獣の話をして仕方がないでしょう——それなら縁日で一度見たことがありますよ。ですが、八歳にも満たない若い紳士が七歳の可愛い娘と駆け落ちしたとすれば、それは奇妙な出来事だと思いますが？ 確かにそうですね。その出来事というのは私自身が幸運にも目にしたもので、二人が履いていた靴を私が磨くことになったのです——二人の靴はとっても小さくて、私の手も入らないくらいでした。

幼いハリー・ウォルマーズの父は、お分かりだと思いますが、シューターズ・ヒルを下った、ラノン（ロンドン）から六、七マイルの所にあるエルムジーズという町で暮らしていました。彼は意気軒昂<sup>げんこう</sup>で男振りがよく、歩く姿もきりっとしていて、いわゆる「熱気」を漂わせていました。彼は詩作をするかと思うと、乗馬、競走、クリケット、ダンス、舞台に立っての演技と、その全てを見事にやって退けていました。彼は一人息子のハリー坊やをことのほか自慢していましたが、甘やかすようなことはしませんでした。彼は断固とした意志と眼識を持つ紳士で、誰もが否が応でもそれに従っていました。そんなわけで、聡明で美しい息子の話し相手に快く

なってやり、息子がおとぎ話を読むことを好んでいるのを見ても喜んでやり、彼が自分の名前がノーヴァル<sup>19</sup>だということを聞いたり、「五月の新月も照り映えて、恋人よ」<sup>20</sup>とか、「汝を愛す人、今は」<sup>21</sup>という歌を歌うのを聞いたりしても、彼は父親の立場を失いませんでした。息子はあくまで子供ぽかったし、子供というのはそうあってほしものです！

私がそこまで知っているんですか？ そりゃ、私が庭師の助手をしていたからです。もちろん、助手なんかになれるはずもなく、夏には窓の近くの芝生の上をいつも動き回り、芝生を刈ったり、掃いたり、雑草を取り除いたり、<sup>きんてい</sup>剪定したりと、あれやこれやしていましたが、家族がどんな暮らしをしているか、知る由もありませんでした。思いもしなかったことですが、ハリ一坊やがある朝早く私の所にやって来てこう言ったのです、「コブズ、もし書けて言われたら、ノラってどう綴る？」そう言って、彼は塀いっぱいノラという名を刻みつけ始めました。

それまで、子供たちに特に目をとめていたわけではありませんが、恋い慕う二人の幼い子供が館の周辺を揃って歩き回っているのを見ると、ほのぼのとした気持ちになりました。少年の勇気きたら、大したものでしたよ！ いやもう、自分の小さな帽子をかなぐり捨て、小さな袖を捲し上げ、ライオンのように強い男に立ち向かっていきかねない子供でした。二人に邪魔が入ったら、彼はきっとそうしたでしょう。彼女は少年のことですとびくびくしていましたね。ある日のことですが、私が砂利道の雑草を鋏で刈っていたとき、彼が少女と一緒に私のところで立ち止まり、臆することもなく私に話しかけてきました。「コブズ」と彼は言いました、「僕はお前のことが好きだ」「そうですか、嬉しく思います」「そうだ、僕はお前が好きだ、コブズ。お前のことが好きなのはどうしてだと思いかね、コブズ？」「よく分かりませんが、ハリ一坊ちゃん」「ノラがお前のことが好きだからさ、コブズ」「ほんとうに？ だったらとても嬉しく思います」「嬉しいって、コブズ？ ノラに好かれることは、キラキラとした何百万のダイヤモンドより素晴らしいことだよ」「さようですか」「お前はここを出るんだね、コブズ？」「さようです」「他の仕事に就く気はないの、コブズ？」「さあ、それが結構なもんだったら、構いませんがね」「じゃ、コブズ」と彼が言いました、「僕たちが結婚したら、庭師頭にしてあげよう」彼は可愛らしい空色の外套を着た少女を抱き抱え、歩き去って行きました。

その幼い恋人たちが長くて明るい巻き毛をして、きらきらと目を輝かし、恋い慕いながら、軽やかな可愛い足で庭園を歩き回っているのを見ますと、ほんとうに絵よりも美しく、芝居も見ているようでした。小鳥たちも二人が小鳥だと信じていて、二人と仲良くして喜ばせるために<sup>さえず</sup>囀っているのだ、と私は思いました。彼らは時にはユリノキの下にそっと入り込んで、お互いの首に腕を回して座り、ぽっちゃりした頬を寄せ合って、「王子と竜」<sup>22</sup>とか「良い魔法使いと悪い魔法使い」<sup>23</sup>とか「眠りの森の美女」<sup>24</sup>といった物語を読んでいました。そして、森の中の家に住んで蜜蜂や牛を飼い、牛乳と蜜だけで暮らそうと二人が話しているのを耳にしたこともあります。ある時、池の傍で二人に出くわしたのですが、その時、ハリ一坊ちゃんがこう言っているのが聞こえました、「すてきなノラ、僕にキスをして気が狂うほど僕を愛していると言ってくれ、言ってくれなければ真逆さまに池に飛び込むしかない」もし彼女がそれに応じなければ、彼は間違いなくそれを実行してたでしょう。二人を見ていると何だか自分が恋を

しているような気になっていました——ただ誰に恋していたのかよく分かりませんでした。

「コブズ」と、私が花に水をやっていたとき、ハリー坊ちゃんが言いました、「僕はこの夏、ヨークのお祖母ちゃんを訪ねるんだ」

「そうですかい、坊ちゃん。楽しんでらっしゃい。私もここを辞めたら、ヨークシャーに行くことにしてます」

「ヨークシャーのお祖母ちゃんの所に行くの、コブズ？」

「いいえ」

少年はちょっと水まきを見てから、また言いました、「そこに行くのが、ほんとうにとっても嬉しいんだ、コブズ——ノラも行くんだ」

「じゃ、大丈夫ですな」と私は言いました、「めんこい恋人と一緒になんですから」

「コブズ」と彼は顔を赤らめて言い返しました、「できれば、そんな冗談はよしてもらいたいね」

「冗談で言ったんじゃないありません」と私は言いました、「遠慮して言っただけで——そんなつもりはありませんでした」

「そう言ってくれて嬉しいよ、コブズ。僕はお前が好きだから、お前はこれから僕たちと一緒に暮らすんだ——コブズ！」

「坊ちゃん」

「僕がお祖母ちゃんの家に行ったら、お祖母ちゃんは僕に何をくれると思う？」

「さっぱり分かりませんな」

「五ポンドのイングランド銀行券だよ、コブズ」

「へえー」と私は言いました、「でっかいお金ですな、ハリー坊ちゃん」

「それだけあれば、何だってできるよね——ね、コブズ？」

「できますとも、坊ちゃん！」

「コブズ」と少年が言いました、「秘密を教えてあげる。ノラの家では、僕のことでノラをからかっていて、僕たちが婚約していると知ってそれを笑い、面白がっているんだ、コブズ！」

「それこそ、坊ちゃん」と私は言いました、「人間が墮落した証拠ですな」

少年は父親とそっくりな様子で、紅潮した顔を夕陽に向けてしばらく立っていましたが、それから「さよなら、コブズ。家に戻るよ」と言って去って行きました。

まさにその時期にどんな経緯で屋敷での仕事を辞めることになったのかと聞かれても、正確にはそれに答えられません。とにかく、その気があれば、今までずっと屋敷での仕事を続けていたでしょう。ですが、当時はまだ若かったものですから、変化が欲しかったんです。私が望んでいたのは——そう、変化でした。私が辞めたいという気持ちを伝えると、ウォルマーさんが言いました、「コブズ、何か不満でもあるのかね？ そう尋ねるのは、もし私の雇っている者に不満があれば、できる限りそれを解消したいからだ」「いえ、旦那さま」と私は言いました、「ありがとうございます。こちらでは、願ってもないほど気持ちよく働かせてもらっています。実は、新しい道を見つけたいと思っているんです」「そうなのか、コブズ！」と旦那さまが言い

ました、「見つかるといいね」そして私は、自分の言葉が真実であることを示すために靴脱ぎ器で私の髪を触って——商売上の挨拶でしたが——まだ見つかっていません、と言いました。

そうなんです！ 私は契約の期日がくると、エルムジーズを去り、ハリー坊ちゃんはヨークの老婦人のところに行きました。老婦人はその子に、どんなに大切なものでも、できれば自分の歯でも（まだ残っていたら話ですが）与えていたことでしょう。目に入れても痛くないほど、その子を愛していたのです。なのに「坊や」ときたら——そう呼んでもおかしくないほどでした——ノラと一緒にその老婦人の家から逃げ出して、はるばるグレットナ・グリーンまで行って、結婚したのです！

私はまさにこの柵亭で働いていましたが（それからもっといい勤め口を求めて何度か辞めたのですが、何やかやがあっという間にも舞い戻っている次第です）、ある秋の午後、馬車がここに乗りつけ、その馬車から二人の子供が出て来ました。車掌が旦那に言いました、「この小さなお客さんたちの目的が分からんですが、若い紳士がここに連れて来るようにと言いましたんで」幼い紳士が馬車から降りて、連れの女性に手を貸し、車掌に自分で何かを与えて言いました、「今夜はここで休むことにする。居間と寝室を二部屋用意してもらいたい。厚切りの肉料理とチェリーのプディングを二人分も！」そう言って、空色の外套を着た女の子を抱きかかえて、堂々と宿の中に入って行きました。

その幼い子供たちが二人だけで「天使の部屋」に悠々とした足取りで入って行ったとき、その宿の人たちの驚きがいかにばかりのものであったか、ご想像にお任せします——さらに男の子が、皆から離れた場所で旦那に自分たちの旅の目的を告げると、旦那は呆気<sup>あっけ</sup>に取られていました。「コブズ」と旦那が言いました、「これが本当なら、わし自身がヨークに行って、親戚の人たちを宥めなくてはならん。そしたら、わしが戻るまでお前は二人に目を配って、うまく調子を合わせておいてくれ。だが、わしがそうする前に、コブズ、お前の考えに間違いがないかどうか子供たちから聞きだして欲しい」「分かりました」と私は言いました、「すぐにやってみましょう」

それで私が「天使の部屋」に上がって行きますと、ハリー坊ちゃんはでかいソファーに座っていて——それでなくてもでっかいのに、彼が座しているとそのソファーはまるで「ウェアの巨大ベッド」<sup>25</sup>のようでした——ハンカチでノラ姫の涙を拭っていました。もちろん二人の小さな脚は床にとても届かず、二人がどんなに小さく見えたか、それを伝える言葉も見つかりません。

「コブズだ！ コブズだ！」とハリー坊ちゃんは叫んで私に走り寄って来て私の手を取りました。ノラ嬢も私の片側に走り寄って、もう一方の手を取り、二人は大喜びで跳び上がりました。

「飛び出して来たんですね」と私は言いました、「坊ちゃんだと思いましたよ。背丈や姿からして、間違いはないと思いました。何でしょう、旅の目的は？——結婚ですか？」

「僕たちは結婚するんだ、コブズ、グレットナ・グリーンでね」と少年が答えました。「そのために駆け落ちしたんだ。ノラは少し元気がないけど、コブズ、お前が僕たちの友達になってく

れたから、ノラも幸せになるよ」

「ありがとうございます、坊ちゃん。そしてありがとう、嬢ちゃん」と私は言いました、「私のことをそう思って下さって。荷物はお持ちになりましたか？」

本当に、名誉にかけて申し上げますが、ノラ嬢は日傘、気付け瓶、一切れ半のバターを塗った冷えたトースト、八個のはっかドロップ、それにヘアブラシ——人形の髪を梳くブラシのようだった——を持ち運んでいました。幼い紳士は、六ヤードほどの紐、ナイフ、驚くほど小さく折り畳んだ三、四枚の便箋、オレンジ一個、彼の名前が記されている陶製のマグを持っていました。

「はっきり言って、これから何をなさるんですか？」と私は聞きました。

「朝になったら、このまま旅を続けて」と少年が答えました—その勇気たるや驚嘆ものでした——「明日、結婚するんだ」

「そうですかい」と私は言いました、「私をご一緒しても構いませんか？」

私がそう言うと、二人は喜んでまた跳びはね、大声を上げました、「ああ、いいとも、構わないよ、コブズ！ いいとも！」

「でしたら」と私は言いました、「失礼ながら私の考えを言わせてもらえるなら、こうされてはどうでしょう。私は小馬を貸してくれる人を知っていて、それで四輪馬車を走らせれば、坊ちゃんとお若いハリー・ウォルマーズ夫人（よければ、私が御者になります）を、それほど時間をかけずに旅の目的地にお連れすることができます。その小馬を明日借りれるかどうか分かりませんが、明後日まで待っていただいたとしても、待つだけのことはあると思います。少々費用ですが、坊ちゃんの手持ちのお金が心細くなっても、ご心配はいりません。私はこの宿の経営者のはしくれで、支払は延ばしてくれるでしょう」

彼らが手をたたき、また嬉しがって跳びはね、「優しいコブズ！」とか「大切なコブズ！」と言って、私の言葉を信じきって嬉しそうに私の前でキスし合っているのを見ますと、無心な二人を騙した自分が、ほんとうにこの世で最も卑劣な悪党に思えました。

「さしあたって欲しいものがありますか？」と、私はひどく恥ずかしい気持ちになって言いました。

「夕食の後、ケーキを食べたいな」と、腕を組み、片脚を前に突き出し、私をまっすぐに見ながらハリー坊やが言いました、「それから林檎を二つ——ジャムもね。食事の時にトーストパンを浸したお湯があったらいいな。でも、ノラはデザートにいつもスグリの実のワインを飲んでいるんだ。僕もね」

「酒場に注文しておきましょう」と私は言って、部屋を出ました。

私は、今お話しているこの瞬間にも、あの時と同じ気持ちがまざまざと甦ってきます。つまり、旦那とぐるになって子供たちを騙すくらいなら、旦那と何度でも話し合って説き伏せた方がいいのではないかと思ったり、そしてあんなに幼い子供たちがあり得ない結婚をしてその後あり得ないほど幸せに暮らせる、あり得ない場所がどこかにあって欲しいと心の底から願ったりしたのでした。ですが、それはあり得ぬ話でしたので、私は旦那の計画に乗り、旦那はその

三十分後にヨークに向けて出発しました。

宿の女たちが話を聞くと——例外なく——一人残らず——結婚している女だけでなく、未婚の娘までが——少年をちやほやすようになり、それには私もびっくりしました。彼女たちは少年の部屋に殺到して彼にキスしようと躍起になっていて、それを押し留めるのが大変でした。彼女たちは所構わず命がけで高い所に上って、窓ガラス越しに少年を見ようとしたり、鍵穴の前に何重にも並んでそこから中を覗き込もうとしたりと、彼のことやその大胆な勇気にのぼせ上がっていました。

夕方、私は駆け落ちした二人がどうしているかと思って、部屋に入って行きました。若い紳士は窓下の腰掛に座って幼い恋人を抱きかかえていました。彼女は顔に涙の痕が残っていて、彼の肩に頭をのせ、ひどく疲れた様子でまどろんでいました。

「ハリー・ウォルマー若夫人は、お疲れですか？」と私は言いました。

「うん、疲れてるんだ、コブズ。家からあまり離れたことがないからね。また元気がなくなっちゃって。コブズ、焼きリンゴがあるといいんだけど」

「何とおっしゃいました？」と私は言いました、「今おっしゃったのは——？」

「ノーフォークの焼きリンゴを食べると、元気が出るんだけど、コブズ。彼女はそれが大好きなんだ」

私が部屋を出て<sup>しよもう</sup>所望された気つけのリンゴを探し、それを持って部屋に戻ると、若い紳士はそれを恋人に渡し、スプーンでそれを彼女に食べさせ、自分でも少し口にしました。幼い夫人は眠気が覚めず、少しむっつりしていました。「どうでしょう」と私は言いました、「燭台付の部屋は？」幼い紳士がそれに同意したので、部屋係の女中が先頭に立って大きな階段を上って行き、その後を若い紳士に付き添われて、空色の外套を着た若夫人が続いて行きました。部屋の前で紳士は夫人を抱き締め、自分の部屋に戻り、私はそっと部屋の扉に鍵を掛けました。

朝食の時に（彼らは前の晩に、甘くした水割りの牛乳、それにトーストとスグリの実のジェリーを注文していました）、二人は小馬の話を持ち出しました。それを聞くと私は、自分が卑劣な裏切り者であることを思い知らされ、穴にでも入りたい気持ちでした。包み隠さず話しますが、私は幼い二人の顔を見て、自分があの邪悪な父<sup>26</sup>に成り下がったと思っただけでした。それでも私は、小馬のことでさながらトロイ人<sup>27</sup>のようにせっせと嘘を吐き通しました。私は、小馬は困ったことに半分毛を刈られていまして、そんな状態で外に連れ出すわけにはいかないのです、外気に触れると身体を壊す恐れがありますから、と言いました。さらに、昼の間に小馬は毛を全部刈り取られ、明日の朝八時に馬車の用意ができます、とまで言ったのです。こちらの部屋でその時のことを全体的に振り返ってみますと、その頃にはハリー・ウォルマー若夫人の気持ちが沈み始めていて、彼女はベッドに入る時に髪をカールできず、自分でブラシをかけようとしてもしないで、それが目に入っていたらしていましたが、ハリー坊ちゃんの気持ちはいささかも挫けることなく、モーニングカップを前にして、自分が実の父親にでもなったみたいに、ジェリーをせっせと食い散らしていました。

朝食の後、彼らはどうやら兵士の絵を描いていたようでした——少なくとも、沢山のそうし

た絵——兵隊はみな乗馬姿でした——が暖炉で見つかったのです。朝のうちに、ハリー坊ちゃんは呼び鈴を鳴らして——驚いたことに、少年はどんなことがあっても挫けることはありませんでした——元気よく言いました、「コブズ、この辺りに散歩にいい場所がある？」

「ありますよ」と私は言いました、「愛の小道があります」

「馬鹿言うな、コブズ！」——それが少年の言った言葉でした——「冗談だろう」

「失礼ながら」と私は言いました、「ほうとうにあるんです。楽しい散歩道ですよ。あなたと若奥様をそこにご案内できれば光栄です」

「ノラ」とハリー坊ちゃんと言いました、「不思議だなあ。愛の小道なら歩いてみなくては。ボンネットを被るんだ、愛しいノラ、コブズと一緒にそこに行ってみよう」

靴磨きは話を続けた。三人で歩いていたとき、二人の話を聞いて私がどんなに卑劣な男であると感じていたか、あなたも分かっていたでしょう。幼い二人は、私が彼らに誠意を尽くしてくれたお礼に、庭師頭として私を雇い、一年に二千ギニーをあげよう、と言ってくれたのです。私はその時、大地が裂けて私を飲み込んでくれたらいいのに、とつくづく思いました。彼らが目を輝かして私を見つめ、私のことを信じきっているのを見ると、自分がほんとうに卑しい人間に思われたのです。それで私は何とかして話の向きを変えようと、愛の小道を下って灌漑された牧草地に二人を連れて行きました。ハリー坊ちゃんはノラにスイレンを取ってやろうとしてあっと言う間に溺れかけました——少年は怯むということを知りませんでした。ですがね、彼らは疲れきっていました。何もかもが目新しく初めて経験することばかりで、疲労はピークに達していました。彼らは森の子供<sup>28</sup>、というか牧場の子供さながらヒナギクの咲く土手で横になり、眠りに落ちました。

私には分かりません——あなたならお分かりでしょう——どちらにせよ、構いませんが——、二人の愛らしい子供が陽の降り注ぐうらかな日に、眠っている時の半分も辛い夢を見ることなく、そこに横たわっているのを目にするとしたら、心が絆<sup>ほど</sup>されて愚かな思いに取りつかれない人いるのでしょうか。そうなんです！ 自分自身のことを考えれば、分かります。自分は生まれてこのかたずっと良からぬことをやっているし、何とも情けない人間で、いつも過去や未来に囚われていて現在をけっして見ようとしないのですから。それが本当のところなんです！

さて、二人はやがて目を覚ましましたが、あることがはっきりしてきました。つまり、ハリー・ウォルマーズ若夫人の気分が変わってきたのです。ハリー坊ちゃんが彼女の腰を抱きますと、彼女が「そんなに苛めないで」と言い、彼が「ノラ、僕の大切なお月さん、君のハリーが苛めるって？」と言うと、彼女は「そうよ。お家<sup>うち</sup>に帰りたいの！」と言うのでした。

茹でた鶏肉とバターつきのパンを焼いてつくったプディングを食べて、幼いウォルマーズ夫人は少し元気を取り戻しました。ですが——靴磨きは彼の気持ちをこっそりと私に打ち明けた——彼女がもう少し少年の言うことを分かってやり、もう少しスグリの実を控えてくれたら、と思ったものです。しかしハリー坊ちゃんは元気を失わず、いつにもまして男らしく彼女をいたわっていました。幼いウォルマーズ夫人は夕暮れになると眠気が襲ってきて、泣き出してしまいました。それで彼女は前日と同じようにベッドに入り、ハリー坊ちゃんも同様に自分の部

屋に戻りました。

夜の十一時か十二時頃、旦那がウォルマーズ氏と年配の婦人を伴って二輪馬車で戻って来ました。ウォルマーズ氏は面白がっていると同時に真剣な表情をして宿の女主人に言いました、「奥様、ご面倒をかけた幼い子供たちに優しくしていただいて、言い尽くせないほど感謝しております。で、奥様、私の子は今どこに？」女主人が答えました、「コブズが大切なお子様を世話しています。コブズ、四十号室にご案内して！」ウォルマーズ氏がコブズに言いました、「ああ、コブズ、君に逢えるなんて！ここにいてくれたんだ！」それに応えて私は言いました、「さようです。いつもだんな様の忠実な僕でございます」

私は靴磨きがそんな言い方をするのを聞いて、びっくりしそうになったが、彼が二階に上がる時に心臓が早鐘のように打っていたと言ったので、私は得心した。「お願いします」と私(靴磨き)は扉の錠を開けながら言いました、「ハリー坊ちゃんをお叱りにならないで下さい。とてもいい少年で、旦那さまもきっと坊ちゃんのことを誇らしく思われるでしょう」さらに靴磨きは私に次のように打ち明けた。もしこの素晴らしい少年の父親が、向こう見ずな気持ちになって——その時、彼は何をしてもおかしくない気分になっていました——私に逆らったりしたら、彼に「一発食らわして」あとはその報いを受けるつもりでした。

ですがウォルマーズ氏はただこう言っただけで、「大丈夫だ、コブズ。何もしやしない。ありがとう！」そして扉が開くと、中に入って行きました。

私も明りを手にして部屋に入りました。見ると、ウォルマーズ氏がベッドに歩み寄り、そっと屈みこんで、眠っている幼い顔に口づけしていました。それから彼はしばらく立ったままで少年を見ていましたが、その顔は不思議なほど少年の表情と似ていました(彼はウォルマーズ夫人と駆け落ちしたということです)。それから彼は少年の小さな肩をそっと揺すりました。

「ハリー、いい子だ、ハリー！」

ハリー坊ちゃんはびっくりして旦那さまを見つめ、私にも目を向けました。健気にも、自分が面倒をかけたのではないかと不安に思って、それを確かめようとしたのです。

「私は怒ってはいない、坊や。すぐに着替えをして家に戻って欲しいだけだ」

「うん、分かった、パパ」

ハリー坊ちゃんはすぐに着替えに取り掛かりました。着替えがあと少しになったとき、彼は立ったまま気持ちがどんどん高まっていき、やがて父親に目を向けました。父親も立ったまま、自分の穏やかな生き写しとも言えるわが子を見ていました。

「お願いがあるんだけど」——幼いながらも何と立派な心意気、そして込み上げる涙を必死に堪えようとようとする男らしさ！「お願い、パパ——ぼく——行く前にノラにキスしていい？」

「いいとも」

父親はハリー坊ちゃんの手を取り、私がろうそくを持って案内し、別の寝室に向かいました。中に入ると年配の婦人がベッドの傍に座っていて、かわいそうなハリー・ウォルマーズ若奥さまがぐっすりと眠っていました。父親は息子とその枕元まで抱き上げ、その小さな顔を哀れに

も無意識で眠っている幼いハリー・ウォルマーズ夫人の小さくて暖かい顔の傍にちょっと置いて、彼女の顔をそっと彼の方に寄せました——扉のところで覗き見していた部屋係の女中たちは感極まって、その中の一人が「別れさせるなんて、ひどい！」と叫びました。しかし、と靴磨きは言いました、その女中はいつも心の優しい娘でした。その娘に他意があったわけではありません。きっと優しい気持ちからそう言ったのでしょう。

それが、と靴磨きが言った、この話の顛末です。ウォルマーズ氏はハリー坊ちゃんの手を取って馬車で帰って行きました。年配の婦人と実際には結婚することのなかった幼いハリー・ウォルマーズ夫人（彼女はずっと後にある海軍大尉と結婚し、インドで亡くなりました）は、翌日宿を發ちました。最後に靴磨きは、二つの意見に私が同意するかどうか尋ねた。その一つは、結婚をしようとしているカップルの中で、この二人の子供のようにまったく邪心のない者はそれほどいない、と言う意見。二つ目は、結婚をしようとしているカップルが、まだ間に合ううちに結婚を阻まれ、別々に連れ戻されるなら、それはめでたいことではないか、という意見である。

### 第三の枝

#### 勘定書き

私はまる一週間雪に閉じ込められた。時がとてもあっさりと経過したので、テーブルの上に置かれた証拠の書付がなかったら、そんなに日が経ったとはとても信じられなかったであろう。

道は前日に雪が取り除かれていて、当の書付は宿泊費の請求書であった。それは、私が「ひいらぎ」の枝のもとで七日七晩飲み食いし、暖を取り、寝泊りしたという証拠を私にはっきりと突きつけていた。

私は自分の務めを果たす必要から、前日に二十四時間ほど出発を見合わせて道が良くなるのを待つことにしていた。私は勘定書きをテーブルの上に置いてくれと頼み、「夕方の八時」に馬車を戸口で待機させるよう指示していた。翌晩の八時、私は携帯用文具箱を皮のケースに入れてバックルで留め、勘定を済ませて、暖かい外套と襟巻きを身にまとった。もちろん、これ以上旅を続けて、私が初めてアンジェラと逢った農家の辺りにきとおびただしく垂れ下がっているであろう氷柱に、さらに私の凍った涙を添えたりする時間の余裕はなかった。私に残された道は、雪のない最短の道を通してリヴァプールに向かい、そこで私の荷物を受け取って、そのままアメリカに向けて出航すること、それしかなかった。それだけでも大変な上に、実行するのに一時間ほどの余裕もなかった。

私は終亭で出逢った友人たちに——さしあたっては、私自身のはにかみにも——別れを告げて、宿の戸口にしばらく立って、馬丁が私の旅行鞆を馬車に縛りつる紐をもう一度しっかり締めているのを見ていたが、その時、「ひいらぎ」荘に向かってランプの明りが近づいて来るのが

見えた。道は雪で埋まっていて、車輪の音はまったく聞こえなかった。しかし宿の入口に立っていた誰も目の前に、道の両側に積み上げられた雪の壁の間を、明りが近づいて来るのが見えた。しかも、それはかなりの勢いで近づいて来た。部屋係の女中がすぐに事情を察知して馬丁に言った、「トム、駆け落ちだわ！」彼女が結婚、あるいはそれに類することを女性本能で嗅ぎつけたことが分かったと、馬丁は中庭に突進して、「馬四頭、用意しろ！」と叫んだ。そして旅館中が大騒ぎになった。

私は愛し愛されている幸せな男に、鬱々としながらも興味をそそられた。それで、すぐに出発しないで、駆け落ちの二人が乗りつけたとき、宿の入口の所で立ち止まっていた。すると、外套に身を包んだ目元の涼しい男が勢いよく私の方に向かって飛び出してきたものだから、私は危うく転びそうになった。その男は詫びを言おうとして振り返った。何と、それはエドウィンだった！

「チャーリー！」と彼は後ずさりして言った、「いや驚いた、ここで何をしてるんだ？」

「エドウィン」と、私も後ずさりして言った、「いや驚いた、君こそこんな所で何をしてるんだ？」そう言いながら、私は自分の額を叩いた。すると、耐え難いほどの強い光が眼前を走るように思われた。

彼は、馬を交代させる際に駅馬車で旅をする人たちが使う休憩室（いつもちよろちよろと火が燃やされていたが、火掻き棒は置かれていなかった）にそそくさと私を連れ込み、中に入ると、扉を閉めて言った、

「チャーリー、僕を許してくれ！」

「エドウィン！」と私は答えた、「どうかしたのか？ 僕が彼女のことをあんなに愛していたというのに！ ずっと僕の命ともいえる女性だったのに！」それ以上、私は言葉が出なかった。

私がひどく動揺しているのを見て彼は驚き、君がそんなに苦しんでいたなんて思いもしなかった、と残酷な言い方をした。

私は彼をじっと見た。彼をもう責めることはしなかった。ただ、彼に目を向けていた。

「愛しいチャーリー」と彼が言った、「僕のことを悪く思わないでくれ、お願いだ！ 君は僕のことをどこまでも信用してくれると思っている。そして、今の今までずっと僕のことを信用してくれていた、と信じている。隠し立てなんてまっぴらだ。その卑劣さを許すことができない。でも、僕も大切な彼女もその秘密を君のために守ってきた」

僕も大切な彼女も！ それを聞くと、私の心は鬼になった。

「君たちは僕のために秘密を守ってきたというのか？」と私は、彼が恐れ気もなくよくもそんなことが言えるものだと驚きながら言った。

「そうさ！——アンジェラの秘密でもある」と彼が言った。

私は、ぐらぐらと回転する鳴りごまのように部屋がゆらゆらと揺れるのを感じた。「説明してくれたまえ」と、私は肘掛け椅子の腕を片手で掴みながら言った。

「いいかい、チャーリー！」とエドウィンは例の心のこもった口調で言った、「考えてくれ！ 君がアンジェラと幸せになろうとしている時に、君を僕たちの婚約を仕組んだ当事者にし、そ

して(老紳士が僕の申し出を断った後で)、君を僕たちの内々の意図を共有する共犯者にして、君に対する老紳士の信用を落とさせる——僕がどうしてそんなことをするだろうか？ たしかに、君が『彼は僕に相談したこともないし、それを話したこともなく、一言も僕に言ったことはない』と老紳士に向かって堂々と言ってくれたら、それに越したことはなかつたらう。もしアンジェラが僕たちの意図を察して、彼女のできる範囲で優しい心遣いと援助をしてくれたとしても——尊い女性、そして尊い妻である彼女に神の祝福がありますように！——僕はこの道を選ぶ他はなかつたんだ。僕もエミリンも、君に何も話していないように、彼女には何も話していない。それも、同じ正当な理由があつてのことだ、チャーリー。同じ正当な理由があつてのことで、他意はまったくなかつたのだ！」

エミリンというのはアンジェラの従妹で、アンジェラと一緒に暮らしていて、一緒に育てられていた。アンジェラの父親が彼女の後見人となっていて、財産もあつた。

「エミリンが馬車にいるのか、エドウィン！」と言って、私は愛情を込めて彼を抱きしめた。

「おい、おい、チャーリー」と彼が言った、「僕が彼女を連れなくてグレットナ・グリーンに行くとても思っているのかね？」

私はエドウィンと一緒に休憩室を飛び出し、馬車の扉を開け、エミリンを両腕で抱きかかえ、ひしと抱きしめた。彼女は雪景色さながら、白くて柔らかい毛皮で身を包んでいたが、温かく、初々しく、美しかった。私は自分で先頭の馬を馬車につけ、給仕たちにそれぞれ五ポンド紙幣を与え、去って行く彼らに喝采を送り、私は別の方向に全速力で馬を駆った。

私はリヴァプールに行くことはなかつた。アメリカにも行かず、まっすぐロンドンに戻ってアンジェラと結婚した。私は、今に至るまで私の秘めた性格や、そのために誤解を抱いたり、思い違いをして旅に出たりしたことを彼女にさえ告白していない。彼女やエドウィン夫婦、そして私たちの八人の子供たちと彼らの七人の子供たちが——つまり、エドウィンとエミリンの子供たちのことであるが、その長女は自分で白衣を身につけられる歳になり、それを着ていると母親そっくりに見える——ここで私が書いている文を読むと、もちろん読んでくれることであろうが、私の正体は結局見破られてしまうだろう。それは構わない！ そんなことは気にしない。私は終亭での他愛のない出来事から、クリスマスの時節にいつそ人への関心を深めるようになり、さらに私を取り巻いている人たちの人生を知ろうとする思いやそれを大切に思う気持ちを持つようになった。私はそれで少しはまじな人間になり、私の近くにいる人たちも遠く離れている人たちもそれ変わらない気持ちを抱いて欲しいと思う。さらに、緑したたる柵の木が生い茂り、その根がイングランドの地に張り、やがては芽を出す希望の種子が天空の鳥によって世界中に運ばれることを願うものである。

## 注

- 1 熱したビールにジン、砂糖、香料を入れた冬の飲み物。
- 2 スコットランドのダンフリーズ、ギャロウェイ州のイングランド国境に近い村。スコットランドの婚姻法が寛大

であったことから、1754～1940年頃までイングランドで結婚を認められないカップルがここに駆落ちして鍛冶屋の立会いで結婚していた。

- 3 イギリスの小説家スモレットの小説(1751)。蛮勇の悪党ペリグリン・ピックルの冒険を叙したもの。
- 4 ローレンス・スターンの紀行文(1768)。
- 5 橋、道路、精神病院などの維持管理のために地方全体から徴収された一般税。
- 6 イギリスの小説家マシュー・グレゴリ・リュース(1775～1818)が自らの小説『僧侶アンブロシオ』を脚色した恐怖劇(1809)。
- 7 水に慣れた鈍い漆黒の毛の大型の作業犬。
- 8 マシュー・グレゴリ・リュース作のバラッド『僧侶』(1795)の中に含まれている。美しいイモージンが、婚約者アロンゾウの出征中に他の男と結ばれたため、その結婚式にアロンゾウの亡霊が現れて彼女を墓に連れ去る。
- 9 11月2日。諸聖人の祝日の翌日で、全ての逝去信徒を記念する日。
- 10 古代のケルト族の間に行われたドルイド教の祭司。預言者・詩人・裁判官・魔法使いでもあった。
- 11 鷲鳥ほどの大きさで、翼が退化して飛べない鳥。かつてインド洋のモーリシャス島に生息していたが、17世紀末に絶滅した。
- 12 古代末期から中世に西方教会で用いられた三位一体論的・受肉論的信条。
- 13 ウィスキーに蜂蜜とオートミールを混合した飲み物。
- 14 ヨーロッパ各地に昔から伝わる物語の主人公の仇名で、フランスの詩人ペローの原作では、六度も妻を迎えては次々と殺し、その死体を密室に隠していたが、七度目の妻にそれを発見されて、彼女の兄弟たちによって殺された。
- 15 ぶどう酒またはウィスキーに果汁・砂糖・氷を混ぜて作るカクテルの一種。
- 16 いろいろな味をつけた砂糖水。
- 17 ジン・ブランデー・ウィスキーなどに果汁・砂糖水・香料などを加えて冷やした飲料。
- 18 フリードリッヒ・フォン・デル・トレンク(1726～94)。プロシヤ軍人・外交官で、その『回想録』(1787)で彼はフリードリッヒ大王によって手や足腰を鎖で縛られたまま、十六年間監禁されたと吹聴している。
- 19 スコットランドの劇作家ジョン・ハウム(1772～1808)の「ダグラス」に登場する人物で、羊飼いとして育てられ、ロード・ランドルフによって殺されるが、ノーヴァルが自分の息子であると後で分かった彼は絶望のあまり自殺する。
- 20 アイルランドの詩人トマス・ムーア(1779～1852)の詩「夏の名残の薔薇」の一節。
- 21 不詳
- 22 不詳
- 23 不詳
- 24 ペロー作の童話、ロバート・サンバーによる英訳名。
- 25 十六世紀に作られた四柱式寝台で、十一平方フィートの大きさがある。現在ヴィクトリア・アールバート博物館に所蔵されている。
- 26 悪魔のこと。「ヨハネ伝」第八章四十四節。「あなたがたは自分の父、すなわち、悪魔から出てきた者であって・・・」

- 27 勤勉家、勇敢な人の意味がある。
- 28 トマス・パーシィの『古謡拾遺集』に収められた古い民話で、小さな男の子と、残忍な保護者の命令で故意に森で迷子にされた少女の話。

編 集 委 員

岸野英治・直野裕子

---

平成21年3月31日 発行

発 行 所 甲南女子大学英文学会  
神戸市東灘区森北町6丁目2-23  
甲南女子大学英語英米文学科コモンルーム  
TEL (078) 413-3124

編集代表

島 式 子

---